

イエスは言われた。「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になって命にあずかる方がよい。地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になって命にあずかる方がよい。地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。」

-マルコ9章-

失うものを惜しまない生き方

入信の時、神は聖霊を注いで私たちを「一つの民」としてくださいました。聖霊は、人を清め、人の深層にまで迫り、時に火で焼かれるような辛さを伴って「キリストの受難と死」に与らせ、人を解放して「平和の人」にさせると言います。しかし、恐れに囚われて自我から抜け出せないと逆に、自分の中に対立を取り込むことになりませんが、聖霊に身を委ね、恐れの本体を見極めるや、落ち着きを取り戻して恐れがなくなっていくのを体験するのです。これが「聖霊による救いの体験」と言われ、主は、地上のすべてに、この聖霊の火がすでに燃えていたらと願われたのです(ルカ12.49) それは「聖霊の清め」に与ったものが「平和の人」とされて世に派遣されるためでした。

かつて、「ガンジー」は「無抵抗主義」を唱え、科学者「高木義之」氏は臨死体験を経て「非対立」を提唱し、ギリシャ人「バスーラ・リデン」は「教会一致」の使者に召されて、かつてモーセとともに、その重荷を担った預言者の、いわゆる現代版の一人とされているのです。



彼らは共に無力で弱い立場に身を置き、ひたすら神に希望を置いて生きている「小さい者」です。この彼らを躓かせる者をイエスは厳しくとがめます。“石臼を首に懸けられて海に投げ込まれる方がはるかによい”と、それは小さい者を世に派遣しておられる

神を殺す殺人者にふさわしい罰は、この世に見当らないほど罪が重いことを指し、逆に神のために働く小さい者に対する「神の愛」の大きさを強調しています。人はこの世で、他のいかなるものを犠牲にしても、神を失う以上の不幸はありません。私たちは神に繋がってさえすれば、失って惜しいものは何一つないのです。命さえも！

人類に本当の幸せが何であるか知っておられるのは神お一人だけです。人の不幸は、その神を知らない故の結果であり、自我が惹かれる富と栄華、いわゆる「幸せのようなもの」に潜むサタンにつけ込まれた、人間の果てのない欲望が、ちょうどジェットコースターにしがみついて悲鳴を上げながら奈落の底に落ちて行くように、果ては破滅に至る不幸です。それは正に、神の思いとはかけ離れた私たちの思いである自我の自己保身、自己中心性(エゴ)に潜むサタンの誘惑に無防備ゆえに陥る不幸です。

それゆえに、キリスト者は入信の時、「洗礼、堅信、聖体」の秘跡を受けて主のもとに皆一つになる聖霊に支えられていることを思い起こし、サタンの支配下にある自我に支配されないように、片手片足片目になっても、神を保つためには失うものを惜しまない生き方、小さい者、難民移住者に水一杯を差し出す心を大切にしたいのです。 2021年9月26日 主任司祭 昌川信雄